

山田、マラリアにかかったってよ

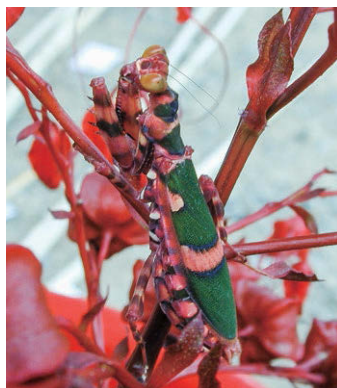
熱帯林研究者はかく語りき

山田俊弘・文と写真

科学ってなんだろう

科学万能的な雰囲気が漂う21世紀の世の中でうそぶくのは勇気があるのだけれど、だいたい私たちは驚くほどなにもわかつておらず、いや、もちろんいろんなことがすごい勢いでわかつてきているし、それを否定しているわけでもなんでもないのだけれど、やつぱり依然として世の中は謎ばかりで、謎のレベルと言ったら、わかった端からまた新たな謎が出てくるというまさに私たちごっこ、深すぎて底が見えませんが、でもわからないことをこのまま放っておくわけにもいかないので、なんとかしてわかってと努力もするわけで、さあここで科学者の登場なのですが、科

学者っていうのは切ないもので、その端くれの私が豪語するのはおこがましい限りなのですが、私たちの仕事はまだまだよくわかっていない現象に対して自分なりに解釈を与え、それがたぶん正しいんじゃないのかなあ、とりあえず私のデータだとこの解釈で説明できちゃうんですけど、的なものをまとめる、というものです。これのどことが切ないかというところ、精神のバランスが崩れそうになるくらい追い込んで作り上げた理論でさえ、白日の下にさらされると、大絶賛を受けるなんてことはなくて、それが本当に正しい解釈なのかって、寄ってたかって批判の目にさらされ続ける、という科学の悲しい性のところ。解釈が正しいかは証明できないけれど、



調査地で出会ったハナカマキリ

間違っていることは証明できるものだから、解釈が間違っていることが証明されるまで、間違っていないか試され続ける、という一方的な試練の連続の運命をたどるのが科学理論の宿命で、あまねくすべての理論が、間違いが指摘されるまでのつかの間の真理として



東カリマンタン州の河畔林

調査を行ったインドネシア、東カリマンタン州の河畔林。調査を行った8月は雨の少ない時期で、河道に水がほとんど流れていないが、雨季にはこの川が氾濫する。このような水辺にマラリアを媒介するハマダラカが生息する

しか扱われないそのぞんざいぶりを見ると、これが私たちがやれる最も健全な科学なんだと心ではわかっていても、やっぱり切なさが込み上げてまいります。私の世代では、こういうどこにぶつければわからない気持ちには、尾崎豊が受け止めてくれることになっていたので、私のワードローブには自然と、自分を尾崎になりすませるために必須の青ジーンズと白Tシャツだけが増え続けています。

熱帯林と冒険と私

私が挑んでいる相手は熱帯林生態系で、ここには謎が詰まっているだけではなく、熱帯林自体が急速に世界からなくなっていて、それを止めるために何をしないといけないか、何ができるのか、というのも喫緊の課題で、こうした課題に対して、私がやらんで誰がやるんじゃ、という自覚だって持っています。激しく、強く。日本国土には熱

帯林がありませんから、私の場合、東南アジアの国々にお邪魔させていただいて、謎解きを行っているのだけれども、もう一度、もう一度だけ一応確認しておきますが、追い求めているのはあくまで真理の探究、私が正しいと信じる解釈をデータで支えてまとめ上げること、これにつぎるのだけれども、それを行うためには相手が熱帯林だから冒険がつきまとうてしまう。レヴィ・ストロース(※)が言ったように、間違っただけなのではないのは冒険の位置づけで、科学者の目的はあくまで科学的真理の追究であって、冒険はそのためになくてはならないものではなくて、それについて回る、副次的でめんどくさい不純物だということ。私の仕事の冒険のほうにスポットが当たるなんてことはあり得ず、それは科学的真理にしか当てちゃいけないことは重々承知の上ではございますが、ほんの少しだけ私の仕事の本質ではないほうの、冒険の部分



ツアランの巨大木
調査地に生えていた、板根が発達したツアラン(*Koompassia excelsa* (Becc.) Taub.)の巨大木。樹冠部にはオオミツバチ(*Apis dorsata* Fabricius, 1793)が営巣していた

悪夢のマラリア

をちょっとだけ紹介しますから、時間もとらせないので、もうちょっとだけ読んでください。お願いします。

熱帯林相手の科学者としての仕事を始めてから早25年、この間毎年、東南アジアのどこかでフィールドワークをしています。こうした国には日本にはない風土病がはびこっていて、マラリアもその一つ。私の調査には常にこうしたリスクがつきまとうのだけれど、それはもう織り込み済みで、リスク回避のための努力を怠ったことなどはありませんから、本来ならばなるはずもないのだけれど、どうなつてんだろうねえ、なつちやつたんだよねえ、マラリア。インドネシア領ボルネオ島でわずか1か月の調査中に罹^かつてしまいました。世界の熱帯域を中心に広がるマラリアは、患者数と犠牲者数が毎年減少しているものの、世界ではまだ数十万

※レヴィ・ストロース『悲しき南回帰線』(講談社学術文庫)

人が毎年命を落とす恐ろしい病気です。マラリアはハマダラカに媒介されますが、この蚊がきれいな自然が残された地域にしか生息できないため、インドネシアであつても熱帯林などで生活しなければマラリアに感染することはまずありません。

激しい悪寒とそれに引き続く高熱が、熱発作と呼ばれるマラリアの典型的な症状ですが、ボルネオ島からジャカルタへ向かう機内で初めての熱発作を起こした私は、内心マラリアを覚悟しながらも、命を落としかねないマラリアの罹患（りかん）を認めたくない自分も頭のどこかに存在し、「きつとマラリアじゃないさ、調査の疲れが出ているだけさ」と自分を慰めながら、高熱のまま現地の医療機関に助けを求めました。私を担当してくれた医師は、おじさんなのにおばさんっぽい髪形をしていて、ミスターダイナマイト、ジェームスブラウンに似ていました。このJBはゲロッ

パ、とかはまったく言いませんでした。が、私をデング出血熱と世紀の大誤診を下す大失態はおかしかったです。私を日本から来た観光客と勝手に勘違いしたJBが、ジャカルタではほぼ感染することがないマラリアを最初から除外して診断を下した成果です。しかし意外

にもこの誤診は、「マラリアは認めたくないな」という私の気持ちにうまく合致していたため、私は案外たやすくそれを受け入れることができました。ただしこの大誤診は私にとつてはたいへん重要なものでもありました。マラリアの場合、すぐにでも投薬治療を始めるければ命にかかりますが、デング出血熱には対症療法しかありません。ただただJBに見守られる日々が続き、日に日にマラリアは私を死の淵（ふち）へと追い込んでいきました。意識を失った私を見て、ようやくおかしいな、と思ったJBが再検査を行い、マラリアと診断したのは、発病後5日目のことでした。

意識を回復したときに見た、「間違っちゃった」とおちやめに笑うJBの顔は今でも忘れることはできません。

ああ、本当に残念なことなのですが、紙面の都合でこれ以上お話を続けることができません。なんとなくですが、ここまで書き進めてしまつたら、科学の真理の追究とかもうどうでもよくつて、マラリア体験を皆さんに伝えるのが私の使命のような、私の中でのなにかがバチバチとスパークする感じさえ催してまいりました。この続きを読んでみたい方は、文二総合出版にその旨をどしどしお伝えください。そんな声が集まればきつと、この続きを皆様にお届けできるチャンスがやってくるはずですよ！

山田俊弘

(やまだ・としひろ)

広島大学大学院総合科学研究科准教授。博士（理学）。専門は熱帯林の生態学。『温暖化対策で熱帯林は救えるか?』（仮題、文二総合出版、奥田敏統・編、2017年6月刊行予定）にて第2章第4節を担当。